

(後編)

オルセー美術館

Musee d'Orsay

所在地 : 62 rue de Lille 75343 Paris cedex 07 France



(写真1)



(写真2)



(写真3)

オルセー美術館の建物の誕生は1900年のパリ万博に遡ります。始めは美術館として建てられたものではなく、万博会場に近いホテルを併設する鉄道の駅舎として建てられました。このオルセー駅は電動車両用に設計されているので、蒸気機関車の煙の心配は

なく、ホームを完全に覆うカマボコ型のガラス屋根になっています(写真1)。天井を見上げると当時の駅のプラットホームに立っているような気分になります。セーヌ川のこちら側(写真2)に万博会場があり、向かいの駅舎には二つの大きな時計が見えます。なるほどと、昔は駅だったのだと納得できます。

さて、その近代性にもかかわらずオルセー駅は瞬間に大型化する鉄道の進化についていけなくなります。ホームの長さが新しい車両には適応しなくなり駅としてはその機能が縮小していきました。

第二次世界大戦後は捕虜の受け入れ施設、銀行の事務所、イベント会場、エールフランスの事務所等、建物は転々とその利用姿を変えていきます。最終的には、立地条件の良さから国際ホテルに立て直すことに決まりました。新しい近代的なホテルの見取り図も完成し解体許可も下りた後に劇的な展開になります。このホテル建設に反対する市民や政治家が激しい抗議運動が起こし、これを管轄する省が、“建物全体とその高さが地域一帯にそぐわない”として建設許可を拒否したのです。まさにオルセー駅がパリから姿を消そうとする土壇場で全面的な取り壊しを免れることになりました。このようにオルセー駅は紆余曲折した道のりの後、1986年に美術館として蘇りました。

この美術館のユニークな特徴は、1848年から1914年という非常に短い、しかし非常に豊かであった時期の芸術作品を一箇所に集めているところです。またオルセー駅であった当時のホテルのダイニングルームもレストランとして再現されています。内装は、ご覧のように宮殿のような輝きがあります(写真3)。最近、色鮮やかなガラスのような椅子に模様替えされクラシックとモダンが融合した斬新さを感じます。

レ・ドック

Les Docks, Cité de la Mode et du Design

所在地 : 34 quai d'Austerlitz, 75013 Paris



1907年築のセーヌ川港倉庫の全面的な再利用で2008年に緑色のチューブのような、またはイグアナのような建物が竣工しました。この辺りは世界遺産指定区域のセーヌ川歴史的建造物群から少し離れているためか、この建設について市民の抗議運動はなかったようです(フランス人は本当にストライキとか抗議行動が好きな国民です)。

さて、この建物を醜悪と見るか優雅と見るか、その判断には個人差があると思いますが、周りの景色と違和感がなく、むしろこの建築の前衛的な美しさと発想の柔軟さに驚くばかりです。また、周りにはガラス張りの建物も多く、写真の左端中程にはセーヌ川に停泊する貨物船、小さく見える地下鉄の陸橋、遠く先には工場の煙突から出る煙も見えますのでむしろ生き生きとした都市の息吹と調和した建物だと思えます。この建物のデザインにふさわしく、建物にはフランスモード学院のほか、アパレルの見本市、家具やブティック、レストランなどの店舗が入り複合施設として注目を集めています。

ルーブル美術館

Musée du Louvre

所在地：Rue de Rivoli, 75001 Paris



セーヌ川中洲のシテ島に紀元前 3 世紀頃からケルト系の先住民族パリシイ族が住み始めたことからパリが始まったと言われています。

12 世紀にはフランス王ルイ 2 世がこのシテ島を中心に広がりつつあるパリ市防衛のための要塞として建設した城がルーブル城で、これがルーブル美術館のルーツとなっています。幾多の年月と増改築を繰り返しこの城は今のルーブル宮殿の建物になっていきました。

1682 年に、フランス王ルイ 14 世が王宮をルーブルからヴェルサイユに移したことで、ルーブル宮殿の主たる役割は王室美術品コレクションの収蔵、展示場所となります。それがルーブル美術館として一般にも開館されたのはフランス革命後の 1793 年です。

先史時代から 19 世紀までの 38 万点以上の莫大な数の美術品のコレクション有するルーブル美術館、そしてそれらを収める箱である建物はあまりにも巨大です。建物は、全体がコの字型をしており、そのコの字の底辺の長さが 500m にも及びセーヌ川右岸に沿って鎮座しています。想像してみてください。これほど長い壁を持つ建造物を見たことがあるでしょうか？ それもただの壁ではなく美術工芸品のような壁です。この写真はセーヌ川に面したその 500m ほど続く壁面の夜景写真です。なぜ夜に撮影したのかと言いますと、石の壁面に彫られたレリーフ状の模様が、街灯の光が作り出す影と夜空によって強調され忽然と現れるからです。建物のどっしりとした石の文化やそこに宿る重厚なルーブルの歴史を想像してみてください。長秒露光で撮影しているため、走行する車の形は消え、テールライトの光の帯がまるでタイムマシンに乗っているかのように閃光になり、自身を現在から過去へ誘ってくれるのです。

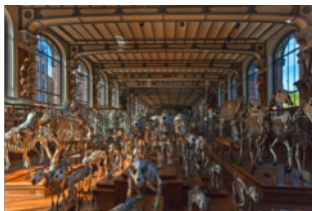
比較解剖・古生物陳列館

La Galerie de Paléontologie et d'Anatomie comparée

所在地：2 Rue Buffon, 75005 Paris



(写真 1)



(写真 2)

パリの中心、セーヌ河岸に沿って南方面に進むと植物園があり、その一角にこの博物館があります。この建物は、19 世紀終わってから 20 世紀初頭にかけて建造されたもので、内部の階段や手すりなどに、当時ヨーロッパを中心に広まった新しい芸術スタイルの要素が取り入れられています。このス

タイルはアールヌーボーと呼び、花や植物などの有機的なモチーフや自由曲線の組み合わせによる従来の様式にとられない装飾性を持ち、鉄やガラスといった当時の新素材が多く用いられているのが特長です。資料室(写真 1)を見ると、階段の手すりにこのアールヌーボーの様式を見つけることができます。

アールヌーボーはフランス語では Art nouveau と書き、Art は英語と同じ綴りですがアールと発音します。つまり「芸術」のことです。nouveau は「新しい」という意味です。つまり New Art ということとなります。ワインのボジョレーヌーボもボジョレー地方の(その年の)新しいワインということですね。

話は脱線しましたが、この建物は 19 世紀の博物館が持つ雰囲気を残しています。レンガ造りの建物、玄関ドアも切符売り場もアールヌーボー時代の趣があり、展示室に一旦足を踏み入ると 1000 体以上の哺乳類の骨格標本のお出迎えです(写真 2)。類を見ない展示はまさに圧巻です。(終わり)